第 2012-12 号

恵みと真理のニュース

2012 年 6 月の 二次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養 5 洞 458-5 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

［証］　願い求める者に奇跡をおこしてくださる神様

“私の力なる神様、私が主を愛します。”神様の恵みの中でⅠコリント13:4～13の御言葉を結婚祝詞として受け入れ、素晴らしい家庭を成してくださって二人の子どもたちを与えてくださり感謝します。

私の義理の母親は真実な信仰をもっていました。そして旦那も信仰の遺産を引き継いで、一生懸命に主を仕えました。

私は長女ができたときつわりがとてもひどくて死ぬ寸前までいったことがありましたが、無事に娘を産むことができました。その後、何年経っても子どもができませんでした。それで私は早天礼拝を捧げながら決意祈りをしました。神様は私の祈りに答えてくださって長女が生まれた後、6年ぶりに息子を与えてくださいました。

旦那は仕事で疲れていても主日を守ることはもちろん、早天礼拝、水曜礼拝まで捧げながら区域長としての務めに就いて頑張って信仰生活をしました。そして祈りに答えてくださる神様の愛を悟った私たちの家族は旦那が課長になるように祈りました。“恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを 守る。”(イザヤ41:10)の御言葉に頼って祈りました。その結果、祈りに答えてくださる神様の大きな恵みをもう一回体験することができました。しかし、課長になった昇進の喜びは短かったです。その後、私たち家族に大きな試練が迫ってきました。神様を信じるキリスト人だという理由だけで職場や社宅でいろんな迫害にぶつかりました。私たち家族はただ神様だけを望みながらみんなで一緒に祈りました。1年後、神様は旦那を故郷の会社へ移動をさせてくださって、家族みんなが感謝の気持ちをもって主だけを仕え、奉仕することができました。私は教会学校の先生や区域長として奉仕し、小学生の娘は幼稚部のピアノ伴奏の奉仕をしながら神様を仕えました。その中、私が生まれ育ったスウォン(韓国の地名)で暮らしたいという思いができて神様に祈りました。そして私たちの祈りに答えてくださる神様が1996年旦那の職場移動を通して願い求めていたスウォン(韓国の地名)へ引っ越しすることができました。もっと感謝なことは家族みんなを恵みと真理教会に導いてくださったことです。当会長チョヨンモク牧師先生の福音的で能力のある御言葉にいつも喜びをもって応じました。そして幸せな信仰生活をすることができました。

その後、神様はもう一つの奇跡をおこしてくださいました。私は旦那が部長になることを願いながら祈り始めました。課長に昇進するときは試験に受かれば昇進できたのですが、部長からはその能力を認められなければならないし、学縁、地縁その他とても重要な条件がたくさんあったため、そんな簡単なことではありません。しかし、私は旦那に“心配しないでください。神様が今年、昇進できるようにしてくださるから。”と言いました。旦那は“まだ昇進名簿に名前も書いてないよ。”と言いました。私は旦那の昇進のためにもっと一生懸命に祈りました。2003年12月26日のことです。旦那が会社から帰って来るごろ電話がきました。“神様があなたの祈りに答えてくださったよ。私が昇進した。”と、旦那が言いました。私は心臓が止まるぐらい嬉しかったです。神様にまこころをもって感謝の祈りを捧げました。その主日、当会長牧師先生に祈って頂きました。そして、これから神様の働きのためにもっと頑張る家族になることを決心しました。

2008年度、旦那はプサン(韓国の地名)で働いていました。ちょうど‘当会長牧師先生招待精霊の癒し聖会’が開かれました。旦那はその聖会を知らせる広報垂れ幕を見て心がいっぱいになり、自負心をもって同僚たちに自慢しながら聖会に参加して大きく恵まれたそうです。神様が共にしてくださったので、旦那は信仰生活も職場生活もうまくやっていきました。

しかし、2011年はとても大変な年でした。職場の人の中で旦那のことを目の前で無視し差別する人がいたのです。旦那はとても大変でした。私はその姿を見て一生懸命に祈りながら宣言しました。“神様があなたをとても愛してくださっているから。今年も必ず昇進するようにしてくださいますよ。そして、その人の恥を見せてくださるから、”しかし、会社の事情によって昇進の発表が予定より約50日延期されました。大教区長と教区長、教区の人々、信仰の家族たちが私の家族のために、旦那の昇進のために何日間祈り続けました。そして2011年12月30日昇進者の名簿に旦那の名前が書かれていました。

2012年度最初の主日、家族みんなが集まって一緒に礼拝を捧げました。とても感激しました。そして、神様に私たちの心を捧げました。“主よ、おっしゃってください。主のしもべが聞きます。”

今年の1年間は私たち家族にたくさんのことがありました。旦那は昇進して再び地方へ行きました。息子は神学大学1年生を終えて兵役に入りました。そして私のお父さんはこの世のことを終わらせて天国へ引っ越ししました。私たち家族はイエス様によってとても幸せです。

勝利を与えてくださった主よ、神様が来られるその日まで家族みんながー千教会の設立と100万聖徒のリバイバルのために大きく用いられる家族になることを願います。アドナイ・ニシ神様を賛美します。ハレルヤ!

［信仰コラム］　主を待ち望む者

“ しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。”（イザヤ40：31）

本文の御言葉は聖徒たちの信仰生活を含蓄的に描いた御言葉です。聖徒は、ただ神様を待ち望む者であり、神様から新しい力を得る者です。‘待ち望む’という言葉には三つの意味をもっています。

第一、‘見上げる’という意味があります。聖書に啓示された神様を見上げる方法は時間、空間の限らずただ心の思いをもって、見上げるべきです。また、自分の心を神様に対する思いで満たして神様に視線を固定するべきです。

ペテロは海の上を歩きましたが一瞬、海の中へ落ちてしまった。その理由は、イエス様を見上げていたペテロの視線が海の波に気付いたからです。その後、恐怖が襲い、信仰もなくなってしまったのです。目の前の現実だけを見ると恐れや心配に心を奪われてしまいます。

人間だけを見てしまうと恨みができます。また、自分のことだけを見ると劣等感におちてしまいます。その半面、天地を造ってくださった神様、悟りと知恵の限りがない神様を思いながら心の目で見上げることによって恐れと心配、恨み、劣等感はなくなります。また、その代わり平安と大胆な心をもつことができます。

第二、‘願い求めながら期待しなさい’という意味があります。被造物である人間が創造主である神様の助けを求めることは当然なことです。資格や手柄があるからではなくて、創造主の愛とその助け無しでは生きていくことができません。幸せになることができないのです。神様の助けを求めないで自分の力や知恵で生きていこうとするから人間には不幸や悲劇が始まるのです。神様の御言葉を聴いて肯定的な期待をもって行動すると神様の権能を体験することができます。

イエス様は自分に対して期待感をもっている人々に限ってイエス様の権能を見せ、溢れみを与えてくださいました。神様の助けを求めているなら、その願いを積極的に表すべきです。神様の助けを求めながら神様に祈り、神様に捧げ、献身する聖徒は恥をみせることはありません。

第三、‘待ちなさい’という意味があります。神様を期待するためには待つ忍耐心をもつべきです。神様は最上のときに最善の方法でものごとを解決してくださいます。ときどき、私たちがおかれた状況の中で変化をおこしてくださいます。問題を解決してくださいます。耐える力を与えてくださいます。急いでいて神様より前に進んでいくと恥と苦労するだけです。

アブラハムは二回神様より急いでいました。ガナンの地に入ってききんが迫ってきたとき、待たずにエジプトに行って、とてもひどい目にあいました。また、子孫を与えてくださるという神様の約束があったにも関わらず、女下部のハガルから息子を産みました。その結果、アブラハムの家庭に大きな風波が立ちました。その半面、ヨセブは17歳の若い歳のとき、夢を通して神様の啓示を受けました。そして、忍耐しながら待ちました。下部として売られ、監獄に入っても神様が働いていることを知っていたヨセブは神様の働きを楽しみにしながら毎日を過ごしました。13年という時間を待っていた結果、ヨセブは王宮に入り、エジプトの総理になりました。

聖徒たちは天国に入って主の前に立つその日まで待つべきです。待っていたほど神様が報酬してくださいます。

主を待ち望む者は新しく力を得ることができます。新しく得る力とは、神様が与えて下さる力を言います。それは霊的な力であり、神霊な力である天国から頂いた力です。このような新しく力を得るためにはただ神様を待ち望んでください。神様を思い、期待し、待ちながら新しく力を得、まるで鷲のように翼をかって上るような生活をおくるようお願って致します。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

一番不幸な隣り

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

去る12月 4日のメスコムでは救世軍慈善鍋に年寄り紳士の一人が 1億１千万ウォンの小切手の封筒を入れたことで話題になりました。金額の多小を問わず不幸な隣りを助けるため参加する人たちの人情があって暖かい社会造りが出来ます。我が教会でも教会予算で隣り助け合いをしています。助け合い宣教会、国内宣教会、男女奉仕連合会を通じて年中に貧しい隣り助け合いをしています。
不幸だということは生活や状況が苦しいくて難しいことを言います。それなら不幸だと言ってすべて可哀想なことではないです。生活や状況は苦しいと言っても心だけは豊かで幸せな人はいくらでもいます。
私たちはできることなら不幸な隣りを助けて，また貧しい隣りを助けなければなりません。それではその中に一番哀れむ隣りが誰ですかかこれをを調べます。
ある町に金持ちがいた。いつも高価な紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。
この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。ある日乞食ラザロが死にました。多分ラザロの死体は収に包まれて共同墓地のすみに埋葬になったはずです。遠からず金持ちも死んで葬られた。
金持ちの葬儀は、派手で盛大に行われたました。人々はラザロを可哀想で不幸な人で思ったし、金持ちは本当に羨ましくて幸せな人と思いました。
ところで人々の見解と判断が正しくないという事実が死の向こう側の世界までつながる話の中で明らかに現われました。
やがて、この貧しいラザロは死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちはの魂は地獄に落ちました。金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。そこで、大声で言った。**『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』**
しかし、アブラハムは言った。**『お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。それればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』**
金持ちは言った。**『父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』**アブラハムは言った。**『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』**金持ちは言った。**『いいえ、 父アブラハムよ、 もし 死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう』**
アブラハムは言った**『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』**
一般的に思えばラザロは人々が称える可哀相な隣りの典型です。しかし、この話の前末をよく見れば実際は金持ちが一番可哀想な隣りです。
この時間、私は本文に出る金持ちがどうして一番可哀想な隣りなのかをおっしゃって上げようと思います。そして彼らのために実在的な助けを施す事に皆さんがもっと積極的な姿勢を持つようになるのを願います。

第一、本文に出る金持ちはその魂が飢えた状態にあったから一番不幸な隣りです。

人は神様の形どおり造られた存在として他の被造物と異となる魂を持った存在です。神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」（創世記１；２６）主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。（創世記２；６） 人は動作と感覚の機関としての肉体だけではなく魂を持った存在として生きています。人間の死と言うのは魂と肉体の分離を意味します。
肉体は食べ物を食べることで命を支えるようになって満足を感じます。ところで人は肉体の満腹だけでは満足できません。
イエス様が**『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』**と書いてある。（マダイ４：４）と言っていました。
霊の欲求を感じないとか霊の飢えの中で思いきり生きて行く人は一番可哀想な隣りです。

第二、本文に出る金持ちは霊的に飢えた状態にあったから一番可哀想な隣りです。

金持ちは紫の衣ときれい亜麻服を着て暮しました。しかし彼が可哀想なことはその魂が裸になった状態だからです。私たちの魂は義の衣を着なければなりません。この服は神様が罪人たちのために予備なさった衣です。
ガラテヤ3章27節では **『キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである』** と言っていました。ローマ3章22節では **『それは、イエス.キリストを信じる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるものである。そこにはなんらの差別もない』**と言っていました。
だからイエス·キリストを信じない人は霊的に裸になった状態である一番可哀想な人です。

第三、本文に出る金持ちが一番可哀想な隣りである理由は、霊的に貧しい状態であるからです。

金持ちは毎日宴を催しながらお金を無駄使いました。果して大金持ちなのが間違いないです。ところで彼は霊的には酷い貧乏人でした。彼は神霊な知識がなかったです。彼は創造主を知らなかったので、宇宙万物の根源と終末に対して無知でした。
人間は魂が過ちと罪で死んだ状態にあることを分からなかった。人類の歴史が神様の主権と攝理の中で進行されることが分からなかったのです。金持ちにはイエス·キリストがくださる喜びと平安が何やら分からなかったのです。
彼は聖徒たち臨むキリストの力をに対して分からなかった。また、彼は真の生の意味と目的意識がなかった。金持ちには天に積んで置いた宝物がなかった。世の中の知識、地位、名誉、権勢、物質が霊的の貧しさを満たしてくれません。世の物で飾って見掛けは良いが神霊な力がなくて、中は空ぽうの人々が一番可哀想な隣りです。

第四、本文に出る金持ちは霊的に孤児だから一番可哀想な隣りです。

彼は多くの人々と付き合いました。それで彼の周辺には人がいつも多かったが霊的には孤児のようでした。聖徒たちは死の場でもさびしくありません。主なる神様の愛される子だから天使たちに支えて天国まで導いてくれます。ラザロは死の瞬間、天使たちに支えられ楽園へ導きました。しかし、金持ちは死の瞬間、寂しく地獄に入りました。

五番目、本文に出る金持ちは永遠に住む所がなかったから一番哀れむ隣りです。

この世はただ旅人の道に過ぎないです。聖徒たちは神様が予備した永遠に住む家を向けて毎日進んでいます。不信者はまるで外国で旅行する間に一流ホテルで宿泊して、決めた日に本国に帰ったら犯罪者に逮捕されて監獄に入れられた人と同じです。金持ちはこの世の旅人生が終わって死の向こう側に行ったら、彼のために予備された所が燃える地獄でした。ラザロと金持ちに関する話は惨めに病んで酷く貧しく住めば楽園へ行くことができるという話しではないです。対蹠的の対照を通じて天国に入るのが比べれない重大さであるメッセージを宣布しています。
この世の中で経験される欠乏と困難と苦痛を信仰で乗り越えれば、多方面に良い結果を得るようになります。だからクリスチャンはどんな場合にも哀れむ隣りではないです。一番哀れむ隣りは今日の聖書本文に出る金持ちのような不信者です。救いを得れなかった隣りが一番可哀想な隣りです。

愛する皆さんは肉身と生活が苦難と欠乏に処した隣りを助けるだけではなく、霊が哀れむ状態である隣りに深い関心を持って福音を伝えてください。
可哀相な隣りに彼らの状態を悟るようにする使命が私たちにあります。彼らが霊的にどれほど哀れむ状態であるかを悟らせなければなりません。
ヨハネの黙示録3章17節18節このような事実を明確に言われました。『あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていないそこで、あなたに勧める。裕福になるように、火で精錬された金をわたしから買うがよい。裸の恥をさらさないように、身に着ける白い衣を買い、また、見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい。』
霊の不幸である隣りが一番哀れむ隣りです。聖徒の皆さんはこのように一番不幸な隣りを救うため、福音伝導へ力つくすように願い求めます。